「ドイツに、行く?帰る?」

「今度は、いつドイツに帰るん?」

小さいときから私は友達にこのように聞かれることがありました。そう聞かれる度に「ドイツへは〝行く〟〝んや」といつも訂正していました。なぜなら、私にとってドイツは里帰りする母に着いて〝行く〟〝場所であって、自分が〝帰る〟〝場所ではないからです。なぜ〝行く〟〝と〟帰る〟〝の違いにこだわるようになったのかは自分でもわかりません。「ドイツに帰れ!」と子どもの頃に言われた記憶はありませんが、実際は言われたことがあり、それでこだわるようになったとも考えられます。

「ドイツにいつ帰るん?」と言われると、まるで「日本から出て行け!」と言われているような気がします。もちろん、この質問をする人は「出て行け!」というつもりでは言ってないと思います。しかし、無意識のうちに出て行ってもらいたいと思っているとも考えられます。そのような「無意識の排他性」は、いまでも時々感じることがあります。

私は日本で生まれ、日本語を第一言語として育ち、ほとんど日本から離れたことはありません。ドイツに〝行く〟〝のも海外旅行と同じ感覚です。それにも関わらず、いずれ「帰る」人のような扱いを受けることがあります。そういうとき、自分がどこに所属しているのかわからなくなります。

自分の所属するところを、帰る場所をわざわざ証明しなければならないのはなぜか?「無意識の排他性」を感じる度に、そういう疑問が浮かび上がって来ます。

二〇〇五年三月一四日

岡村 兵衛

Copyright(C) 2005 Hyoue Okamura All Rights Reserved. www.kreuzungsstelle.com